



この夏の読書から

帝京大学小学校 校長 石井 卓之

夏休みは、子どもたちにとって新たな学びや体験があったことだと思います。3年生は国語ではがきの書き方を学習し、その実践として暑中見舞いや残暑見舞いを出すことが宿題となったそうです。例年になく多くの子どもたちから夏の楽しそうな様子を伝えてくれるはがきをもらいました。そんな話が聞ける2学期がいよいよ始まります。私はこの夏休み、多種多様な本をいつもよりも時間をかけて読んでいました。

月刊「先端教育」の9月号を読んでいたら、帝京大学の日本語教育センターの記事が載っていました。冲永理事長・学長の教育方針に基づき、国際化ビジョンに早期から取り組んだ結果、留学生が1,000名以上在籍していると紹介されていました。

着任時、1年生から学んでいる英語学習のゴールイメージを、子どもたちにもたせる必要性を感じていました。英語を学んだ結果、自分のコミュニケーション力はどのように変わったのか、何がどのように身に付いたのか、その実感をもつことが新たな学ぶ意欲につながるからです。そこで、5年生を対象にアウトプットの場の一つとして、日本語教育センターと連携して留学生との交流を開始しました。

2020年は、コロナ感染症のために留学生は母国に帰っており、実施することはできませんでした。昨年度、本校の英語科が企画を立て、日本語教育センターの担当者と調整を図ることで実施することができました。当日は英語で学校の特色を紹介したり、一緒にゲームをしたり、グループに分かれて学校案内をしたりしました。センターの方や参加した留学生からも好評で、もっと日常的に交流できたらよいとの意見もいただきました。今年度も内容の改善を図りながら実施していきます。やがては、日常的に留学生が小学校内で子どもたちと遊んだり、会話をしたりする場となることを夢見ています。そして、小学校での英語の集大成が6年生で昨年度から始めた「東京グローバル・ゲートウェイ」での一切日本語を使用しない英語体験となります。それぞれの学年でインプットとアウトプットが実感をもちながら進んでいくことが重要だと思っています。

Eテレの「100分de名著」をよく見えています。この夏休みはいつもの番組ではなく「フォーティーンズ」と題し若者向けのシリーズが4回ありました。その中で、ヤニス・ハルファキスの「父が娘に語る経済の本」と出会いました。この本を読んで、ヤニス氏がギリシャの経済危機時に財務大臣を務め、当時話題になったEUから財政緊縮策を迫られるなかで大幅な債務帳消しを主張して世界的な話題になった人物であることを知りました（当時、この政策のことはニュースで知っていましたが、この本の著者であることは知りませんでした）。著者は、「十代半ばの娘に向けて、『経済についてきちんと話そうができるように』という思いから、できるだけ専門用語を使わず、地に足がついた、血の通った言葉で経済について語った」としています。世界史で学んだイギリスの「囲い込み」や産業革命を経済から見ると、今まで知らなかった見方があることに気付きました。また、「仮想通貨」が1万年以上前から存在している、なぜアフリカから強国が出てこなかったのか、古代ギリシャ人は「オークション」をしないなど、私にとって新たな知見が数多くありました。自分が中学・高校で学んできた世界史や政治経済という縦割りの教科がこの本を通して横につながり、「そうだったんだ」と実感できました。小学生には内容的に難しい部分もありますが、大人が読んでエッセンスを子どもたちに話すことがあってもよいと感じました。もちろん、自力で読める力があれば言うことなしですが。

2学期もよろしく願いいたします。